



VIAGGIO IN ITALY



大森愛子のイタリア紀行
AIKO OMORI PRESENTI

ソムリエ。ワインスクール講師。
世界15カ国以上を旅したのち、何だか面白そうなイタリアに移住。
現在、定職・定住地なし。強運のみを頼りに移動生活を続ける。
旅の最大の目的は、それぞれの国の人人が何を大切にしているのか
を知ること。

2016 26 5.21

イタリア語が使える場所

前々回から二度にわたってイタリア語について触れてきましたが、なるほどイタリア語って便利じゃん、よし今年の夏はイタリア語を学んでみよう!と思われた方は少ないと思います。だって英語や中国語ならまだしも、イタリア語を使う機会なんてイタリアに行かない限りほぼないんですから。

イタリア語を日常的に使用する約6,000万人のほとんどがイタリアに住んでおり、隣の国のスペイン語がスペイン本国の他にも、チリ、アルゼンチン、ペルー、コロンビア、キューバ、メキシコ、グアテマラなど20カ国以上の国で約4億2,000万人の人々によって話されているのとは大きな違い。スペイン語を話せるようになれば、きっと、タンゴやサルサを習うときにも人一倍上達は早く、ペルーのマチュピチュやナスカの地上絵の見学中も現地の人に道を聞いて目的地まで素早く辿り着き、キューバではコイバ(葉巻)に火を付けてもらえ、メキシコ人とはテキーラで乾杯できるはずです。うらやましいぞ、スペイン語。

一方、イタリア語を公用語としている国といえば、イタリアとスイスの一部地域のみ。日本でイタリア語が多少わかつて喜ばしいことを挙げるなら、イタリアンレストランのメニューが読みやすくなることぐらいでしょうか。そしてウェイターとちょっぴり仲良くなれる。それだけ。そう思っていた矢先、見つけてしまったのです!イタリア語の単語が多少わかると俄然面白くなる分野を。それは、

Opera!

オペラはお好きですか?

イタリアが生んだ世界最高の舞台芸術のひとつであり、演劇、音楽、美術を総動員して作り上げるため、「総合芸術」とも呼ばれるオペラは、ルネサンス後期の16世紀末、フィレンツェで生まれ、その後イタリア全土へと広がって行きました。

…なんて講釈をしてみたものの、私のオペラへの造詣は極めて浅く、勿体振って話せることなど何もありはしません。知識といえば、家にオペラ名作鑑賞DVD全10巻が並んでいて、代表的な作品のあらすじと超有名なオペラ曲なら知っているけど、くらいのもの。

正直に言って、オペラ作品はあらすじだけを書き出してみても、ストーリーに捻りがなく何が面白いのかよく分からぬと思っていました。中学生のころ音楽の授業で、モーツアルトの《魔笛》の筋書きを読んで「え、何これ?」って思いませんでしたか?荒唐無稽、能天氣で安直、あり得ないストーリー展開…

しかし今なら分かります、それでこそオペラなのだ！オペラの世界は現実ではありません。日常を離れ、夢の世界と知りつつ、あえてそれを楽しむ…そんな時間と場所が、大人には必要なのです。更に言うならばオペラはお芝居でもありません。オペラをオペラとして成立させている大きな要因、それは音楽です。セリフが歌われるためにオペラはお芝居に比べて言葉の量がずっと制限されていて、その限られた言葉を補って奥行きを作っていくものが音楽による表現です。単なる効果音や、バック・グラウンド・ミュージックとは全く別の次元にある、ドラマ展開と密接に関係している音楽の魅力に身を委ねていれば、興味をそらすことなく楽しんで観ることができるのがオペラの舞台なのです。



とりあえず劇場に行ってみるのだ

ミラノのスカラ座、ローマのオペラ座、ボローニャのコムナーレ劇場…イタリアには有名な歌劇場が数多くありますが、残念ながら私のオペラ・デビューはイタリアではなく、オーストラリア。シドニーのオペラハウスでした。

当日上演された作品は、ロッシーニによる《セビリアの理髪師》。

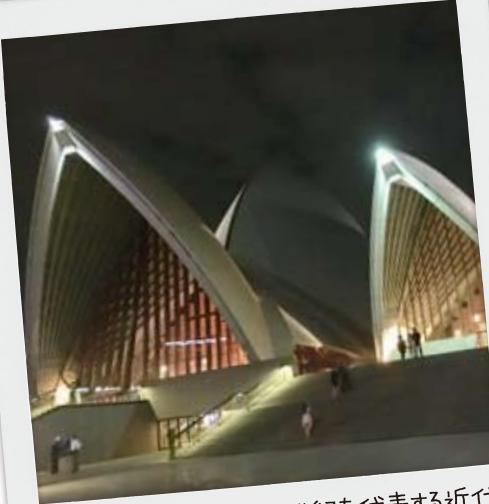
オペラ・ブッファと呼ばれる喜劇的な演目で、全曲にわたってテンションが高く、気軽に楽しめる、オペラ初心者にはもつてこいの作品。演出家によっては現代風の解釈も加わり、ストレートに笑いを誘う表現は吉本新喜劇を思わせるようなドタバタコメディです。

当日はちょっと寝不足で、お連れの方には、寝ちゃったらごめんなさい～なんて言いながら劇場に入ったのに、序曲の演奏が始まった途端、眠気なんて吹っ飛んでしまいました。もう、めっちゃ楽しい！

土地柄オーストラリア人のイージーゴーイングな雰囲気で演じられていたからでしょうか？指揮者も演奏家も歌手も、作品に関わる全ての人たちがとても楽しそうに（ときにはくすくす笑いながら）舞台を作っていて、その生き生きとした姿から目が離せませんでした。

そして幸運にも、舞台上で使われている言語はイタリア語。もちろんすべての言葉が聞き取れるわけではありませんが、歌手が歌うイタリア語の単語を拾って、生きた言葉の表現を感じられたのは大きな喜びでした。オペラって何て楽しいんだろう…。どこで何が役に立つか分からないものです。

オペラの世界は、喜劇の他にも、悲劇、史劇、政治劇、神話、伝説、民話…あらゆる種類のドラマを用意して、劇場の扉が開かれるのを待っています。難しいことは抜きにして、機会があればぜひオペラの世界へ足を運んでみてください。演劇・音楽・美術といったあらゆる芸術を一度に体感できる場所なんて、オペラ以外にありませんもの。



シドニーのオペラハウスは20世紀を代表する近代建築物としても知られています。



オペラハウス内に位置するシドニー港を一望できるレストランも。
Guillaume at Bennelong

次回は《セビリアの理髪師》の作曲家、ロッシーニについてもう少しお話させてください。美食家としても知られるロッシーニ。そう、あの有名な牛フィレ肉とフォアグラを使ったお料理の考案者は、オペラ曲の他に、数々の贅沢なレシピも産み出しているのです。

